



## テクノロジーの進歩に驚愕するばかり

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。  
「公事宿法律事務所」代表。

令和5年9月25日から同月29日にかけて5回の連載で、日本経済新聞紙上に「テクノ新生」と題する特集が組まれた。私は、全くの素人ながらその内容を読んで、現代社会に於けるテクノロジーの進歩に驚愕するしかなかった。テクノロジーの進歩に沿つて人間の欲求も際限なく広がりを見せており、企業側も、際限なく見せており、企業側も、際限なく

い人間の欲求をさらに先回りし、すごいスピードで開発を進めていることが如実に分かる。たとえば、ペットクローンを作るベンチャーエンターテイメント企業はすでにあり、病気で余命いくばくもない愛犬の皮膚細胞を採取し、死亡した犬が帰ってきたと感じたというが、写真を見ると生前の愛犬と愛犬クローンはとても似ているのがわかる。同企業では、「遺伝子レベルでは99.9%以上同じ。飼い主や飼育環境が同じなら、性格も似るだろう。顧客満足度は100%に近い」と語っていると

この欲求は、当然、ペットのみならずヒトに対しても波及する。

「死後生殖」という言葉がある。その意味は、精子（卵子）の提供者が死亡した後、保存されていた精子（卵子）を用いて人工授精を行うことをいう。実際に、我が国においても、夫に先立たれた妻が夫の凍結精子を用いて人工授精し、その後、子を出産した事例があり、生まれた子を亡夫の子として認知する旨を裁判所に求めた事案があつた。これについて、最判平成18年9月4日は、我が国の民法の規定が、夫の死後に懷妊するという意味での死後懷妊子と死亡した父との間の親子関係は想定しないとしてこれを認めなかつた。もちろん、

1年後に、飼い主は愛犬クローンを受け取れたという。飼い主ら家族は愛犬が帰ってきたと感じたというが、写真を見ると生前の愛犬と愛犬クローンはとても似ているのがわかる。同企業では、「遺伝子レベルでは99.9%以上同じ。飼い主や飼育環境が同じなら、性格も似るだろう。顧客満足度は100%に近い」と語っていると

この欲求は、当然、ペットのみならずヒトに対しても波及する。

「死後生殖」という言葉がある。その意味は、精子（卵子）の提供者が死亡した後、保存されていた精子（卵子）を用いて人工授精を行うことをいう。実際に、我が国においても、夫に先立たれた妻が夫の凍結精子を用いて人工授精し、その後、子を出産した事例があり、生まれた子を亡夫の子として認知する旨を裁判所に求めた事案があつた。これについて、最判平成18年9月4日は、我が国の民法の規定が、夫の死後に懷妊するという意味での死後懷妊子と死亡した父との間の親子関係は想定しないとしてこれを認めなかつた。もちろん、

最高裁も述べているとおり、死亡した者の保存精子を用いる人工生殖に関する生命倫理、生まれてくる子の福祉、親子関係や親族関係を形成されることになる関係者の意識等、多角的な観点から検討を加えて立法で解決すべき問題ではある。しかし、この事例では、亡くなつた夫は、生前、もし自分が先に死亡した場合でも妻が再婚しなければ、自分の凍結精子を用いて子を産んでほしいと妻に話しており、夫はその両親に対して、授かった子に家を継いで欲しいとの意向を伝えていた。おそらく、子を出産したであろうし、出生した子は紛れもない亡夫の子である。奥さんや子を取り巻く環境は、亡夫の実子としての身分が得られなかつたため一層厳しさを増したことは想像に難しくないが、しかし、家族に関する多様性の1つとして、立法府を通じて議論が進むことを切に望みたい。

この点、海外でも倫理的な問題等で遺体から精子を採取することを禁止している国も多いが、イスラエルでは死後生殖を認めている。具体的には死前に採取された凍結精子を用いることは言うに及ばず、死後に遺体から精子を取り出し、その精子を利

用して配偶者が懷胎することを認めている。死因にもよるが、技術的に口減少等の現状に果敢に挑んでいくべきである。このように、この連載では、昨今の地球環境の変化を踏まえ、干ばつ地域に雨を降らす雲を育てる雨粒を作り出す仕組みや、パリ協定で決まりたため、二酸化硫黄等を使って太陽光を遮断する「太陽放射管理」という技術や、マラリアなどの感染症による死者が年間70万人を超えている状況等を踏まえ、子孫が繁殖できないうよう遺伝子改変をした蚊を野に大量に放ち、野生の蚊と交配してもメスがふ化しても育たず、子孫を残せないオスだけ残るようにして世代を経て蚊が減る仕込みや、逆にすでに絶滅した動物をゲノム編集技術によりよみがえらせる試み等が報告されており、大いに好奇心が燃られる。倫理等の問題を踏まえながらも我々が導いてしまつた地球環境の悪化や人口減少等の現状に果敢に挑んでいくべきである。

この連載では、昨今の地球環境の変化を踏まえ、干ばつ地域に雨を降らす雲を育てる雨粒を作り出す仕組みや、パリ協定で決まりたため、二酸化硫黄等を使って太陽光を遮断する「太陽放射管理」という技術や、マラリアなどの感染症による死者が年間70万人を超えている状況等を踏まえ、子孫が繁殖できないうよう遺伝子改変をした蚊を野に大量に放ち、野生の蚊と交配してもメスがふ化しても育たず、子孫を残せないオスだけ残るようにして世代を経て蚊が減る仕込みや、逆にすでに絶滅した動物をゲノム編集技術によりよみがえらせる試み等が報告されており、大いに好奇心が燃られる。倫理等の問題を踏まえながらも我々が導いてしまつた地球環境の悪化や人口減少等の現状に果敢に挑んでいくべきである。